

第26回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ①

「一生の友達」

長南 愛海

成田国際高等学校 2年



4泊5日のソウルでのキャンプ、参加する前はこんなに素敵な思い出が出来るなんて思ってもいなかったし、最終日キムチ工場でお別れする時、自分がこんなに泣くなんて思ってもいませんでした。泣いてしまうほど、みんなとお別れするのが寂しかったのです。そんな私の一生の宝物になった5日間のキャンプを振り返ってみます。

私たちが韓国に行く寸前に日韓関係が急激に悪化し、私自身も韓国行って大丈夫なのかという不安がありました。ですが、実際行ってみるとそんな雰囲気は全然感じず、すぐに韓国の子達と親しくなれました。

今回のキャンプで1番驚いたことは、韓国の学生みんな日本語が上手ということです。韓国学生の日本語力のおかげで、事業を決める話し合いなども言葉の壁なくコミュニケーションをとる事が出来たのですが、それに反して私は韓国語を話すわけでもなく、韓国学生に任せっきりにしてしまったので、もっと韓国語を勉強し準備して挑めばよかったなと後悔しています。これから

韓国語を勉強して、次にメンバーに会う時は私が韓国語で話してコミュニケーションをとりたいです。

この5日間での1番の思い出は、本番前日に男子部屋に集まってみんなで徹夜で作業をした事です。作業は夜中の4時位まで続き、みんな眠さと戦いながらでの作業でした。自分の作業が終わった子でも、「大丈夫？手伝うよ」などと声を掛けてくれた事、ほんとに嬉しかったです。ありがとうゆき君！

みんなで身をボロボロにしなが、頭を抱えながら考えた事業案を発表し終えた時、私は大きな達成感を感じました。清々しいというかやり切った！っというような。目標であった最優秀賞は取れなかったのですか、私が感じた、「達成感」の方が最優秀賞よりももっと価値のあるものだと思いました。

発表をし終えたあとの思い出は、もう何もかも楽しい思い出ばかりです。4日目の

夜、みんなで集まって人狼ゲームをしたり、ババ抜きをしたりしました。人狼ゲームはもう人生で経験することはないであろう、「2ヶ国語人狼ゲーム」です(笑)。日本人同士でやる人狼ゲームよりは、すんなりいかなかったりコミュニケーションが大変だと感じましたが、このゲームのおかげで「言語、言葉」というのがこれほど大切なんだということを学ぶことができました。そして、このゲームで負けたひとは激辛で有名なブルダックラーメンを食べるという罰ゲームがありました。水を沢山入れて、辛くないようにしたよーと言われて食べたのですが、ものすごく辛かったです(笑)。

私は初めて韓国に行って、初めて本格的な韓国料理を食べたのですが食文化の差がすごいと感じました。同じ辛さなのに、韓国の子達は全然辛くないと言い、私たち日本人は辛い辛いと言い…。辛かったけど、本場のトッポッキやキムチなどを食べることができて、良い思い出ができました。逆に韓国の子達は日本料理を食べたらどういう感想なのかなと気になりました。メンバーの韓国の子達にぜひ今度日本に来てもらって感想を聞きたいです！

さて、私はこの5日間でたくさんのことを学び、大きく成長したと思います。この

キャンプの存在を知ったとき、まだ受かってもないし、行けるかどうかも分からないのに韓国の高校生ってどんな感じだろう？会ったら何を話そうか？友達になりたいなあなどと想像していました。そして実際に家に合格の電話が来た時は、飛び跳ねて喜んだ記憶があります。キャンプ当日は予想していた通り、いや予想を上回りました。

新しい事業案を考えるというのは日本人同士でも難しいことなのに、違う国で暮らしてきた私たちが達成出来たというのは、凄いことだと思います。

このキャンプで、韓国での生活文化も学べたし、韓国の子達に日本のことも伝えられたかなと思います。出会った1日目、実際に現場で学んだ2日目、一日中頭を抱えて、知恵を出し合った3日目、成果を出し切れた4日目そして、別れの5日目、一日一日に大切な忘れられない思い出があります。5日間という短い期間だったけど今まで生きてきて、1番濃い1週間でした。

メンバーの韓国の子とはこれからずーっと連絡を取って交流していきたいです。

最後に、一緒に5日間共にしてくれたチーム5「お好み焼き」のみんなありがとう！！

「日韓関係と自分」



山本 貴仁

東京都立日比谷高等学校 1年

私は K-POP にも韓国の食にも興味はない。ただ韓国の人に対する好感は増し、歴史にも興味を持った。今すぐにでも再び韓国に行きたい。これがキャンプを終えての感想だ。

「戦後最悪の日韓関係」こんな見出しが連日一面を踊っている。いくら中立的立場でこれらの報道と接しても、どうしても日本にいと韓国に対する印象は悪くなる。私は政治や国際情勢に強い関心を持っているので、やはり韓国に対する印象はあまり良くなかった。

では、そんな私がなぜこのキャンプに応募しようと思ったのか。2つのターニングポイントがあった。1つは友人が春に韓国に行っていたことだ。これで少し韓国に興味を持ち、テレビ欄の「韓国」に反応するようになった。そして2つ目は「池上彰の現代史を歩く」韓国編だ。韓国の政治と歴史の詳しい解説に加え、特に池上さんと韓国の大学生の対談企画が韓国に対する興味を一層引き立てた。韓国の学生の日本に対する印象は驚くことにとっても良かった。私は胸を突かれる感じだった。なんて狭い世界で物事を見ていたのだろうと後悔した。

この流れのままポスターを偶然（必然？）見つけ、いつの間に応募し、参加することになった。

そんな私のキャンプでの目標は2つであった。韓国の人々は日本に対して実際にどういうイメージを持っているのかを知る。世界の中での自分を意識する。この2つだ。

韓国の学生は日本に対して総じて良いイメージを持っているほか、現場視察やキムチ工場での韓国の方の親切な態度には嬉しく思い、政治と人は全くの別ものだと感じた。バス移動の際にチームメイトのジュンヒョンと政治や経済、日韓関係について討論することができた。彼はこんな難しい話題を日本語で表現することができ、本当にリスペクトしている。その中で文政権の対応は賛否両論であり、決して韓国国民の総意ではないことを知った。両国は対抗措置の応酬に自制をすべきということで一致した。一方歴史問題では大きな溝があった。そもそも教科書で教えていることがまるで異なり、これをベースにお互いが話しても全く通じないのだ。おそらく徴用工にせよ、竹島にせよ両国民が感情的になるのはこう

ということからだろう。キャンプに参加しなければこのことは知る由もなかっただろう。

世界の中での自分はまだまだちっぽけなものだ。韓国の学生の勉強熱心さには本当に驚いた。日本ではあり得ないほど勉強している。チームメイトのチュンユンは半年の勉強で日本語がペラペラになっていた。他にも韓国の教育のレベルは高いと感じる場面がいくつもあった。プレゼンテーション準備においても利益の計算やパワーポイントの準備、原稿の準備、手際がものすごく良く強い刺激を受けた。自己研鑽を重ねていかなければならない。日本の人口が大きく減った頃の GDP は韓国に抜かれてしまうのではないかとも思った。韓国が友好国でもあり良きライバルでもある時代に早くなってほしい。

最後にチョンナム（チーム3の名称）のみみんなに感謝したい。この11人で巡り会えた

ことは奇跡だ。5日間毎日が楽しかった。本当に不思議だけど会った瞬間から仲良くなり言葉の壁もあまり感じる事がなかった。言葉が通じない相手でも”ノリ”は万国共通でチームに笑顔が生まれた。この経験は一生忘れることはない。このような体験をさせてくれたのがこのキャンプだ。このキャンプを支えてくれた全ての方に感謝したい。本当にありがとう。

このキャンプを通して日韓関係の当事者になった気がする。当事者として日韓友好の架け橋となれるような役割をしたい。日本人に韓国を正しく伝えることや再び韓国を訪れることだ。ただ、この感想文を提出する直前にも日韓関係を悪化させる事案が発生している。そして私が何より心配しているのが訪日韓国人の数が減っていることだ。民間の往来は苦しい現状を乗り切る上で最も大事だと思う。当事者として今後の関係を注視していきたい。

「『盲目』から抜け出すこと」



草間 聖治
本郷高等学校 2年

今回のキャンプは、自分にとって大きな

転機になったなあと、終わった今になって

強く感じている。

そもそも、誰とも連絡先を交換しなかったためにキャンプのグループ LINE に当日入ったということからわかる通り、僕は極端に人見知りである（そういえば、僕と同じく当日に空港でグループに入った人がもう 1 人いた気がするけれど、誰だったのだろうか？）。チームメイトの伯君からは、金浦空港で 6 チームのメンバーが集められたとき、「こいつ誰だろう」と思われていたらしい。空港から宿舎へ向かう途中のバスの中では 1 人無言を貫き通し、延々と流れる車窓を眺めていた。その間、チームメイトとはきっと上手く打ち解けられないのだろうかあと今後のことを憂慮してため息をついたものである。

結局、この心配は杞憂に終わった。バスを降りてから、どっちから話し始めたのか覚えていないが、まずルームメイトになる工藤伯君と話をした。話してみても思ったのだが、彼とは話がすごく合う！日頃僕の周りには友人が、少々頭のネジの外れているおかげで、僕の中にはよく分からん知識が蓄積されている。その知識はいままで出ることなく燻っていたのだけれど、伯君には通じるし、逆に僕に新たな知識をもたらしてくれた。後で聞いたところによると、高校生クイズの山形県予選の決勝で惜しくも敗れてしまったのだという。彼の知識はクイズの賜物だったのか！いやあ、伯君すげー！！

続いて、韓国の高校生たちと合流するこ

とになった。予定よりもだいぶ時間にゆとりがあったらしく、「みんなで話してください」と言われた。このとき、キャンプが始まって初めて「もっと韓国語を勉強しておけばよかった」と後悔した。ちなみにこの後 10 回以上同じ内容の後悔をしている。

そんな僕だったが、隣に座っていたソンミン君（ハングルで打ちたかったけど、あいにく PC では無理だった）が流暢な日本語で話しかけてきたので、びっくりしてしまった。さらに驚いたのが、彼は独学で 1 年間、学校で半年間の計 1 年半しか日本語を勉強していないというのだ。さらにさらに、後になって驚いたことだが、彼は日本人が話すかなり崩された日本語に順応していて、こちらのお話をすべて拾い上げ、完璧に意思疎通をこなすことができたのだ。いや、ソンミン天才すぎないか？

こうして、日本語のエキスパート・ソンミン君のおかげで、開会式前の雑談タイムを孤立することなく、つつがなく終えることができた。不思議だったのが、今まで日本で似たような状況（見ず知らずの人たちと雑談するような機会のことだ）になったとき、僕はまったく話さず、むしろ人の話に耳を傾ける側だったのに、今回は自分が話す側にもなったことだ。いったいなぜだか皆目見当もつかないのだが、このあたりから「いつもと違う自分」が形成され始めたような気がする。

しかし、そんな状況下でも僕の人見知りは健在で、キャンプ 3 日目まで 6 人いるチ

ームの女子と碌に会話をしなかった。それどころか、名前さえもちゃんと覚えておらず、自分の中で分かりやすいあだ名をつけて識別していた。3日目の夜だかに、チームメイトのヒョンギョンに正直に「名前を覚えてません」と言ったらものすごく呆れられた。その時には、きっと変なやつだと思われたことだろう。

でも、そのおかげでメンバー全員の顔と名前が一致したし、少なからず話もすることができるようになった(いや、遅いよ)。しかし、結局キャンプが終わるまで学年はよくわからなかった。理由は、そもそも話題にあがらなかったこと、学年について気にする余裕がなく、みんながタメロで話していたこと、そもそも僕が学年差を気にしていないことなど様々挙げられるけれど、特に大きかったのはメンバーが自分のことを下の名前で呼んでいて、自分も相手のことを下の名前で呼んでいたことかなと思う。

日頃、僕は家族以外から下の名前で呼ばれたことがなく、基本的には「草間」と呼び捨てにするか、そのあとに敬称がつくかのどちらかであった。それが、キャンプにいた5日間、「くさま」の3文字を耳にしたことがほとんどなく、僕としてはむしろがゆく新鮮な気分だった。誰が言っていたかは忘れたけれど、韓国では同じ苗字の人が多いため、自然と下の名前で相手を呼ぶようになっているらしい。みんなにとっては当たり前だったのかもしれないが、僕にとっては新鮮で、まるで別世界に生まれ変わったかのような心持さえしたものだ。同時に、自分の生きている世界は狭いんだ

なあと、名前の呼び方ひとつで痛感させられた。僕の世界では、上の名前で呼び合うことが普通になっていたのだ。

さて、少し話は変わるが、キャンプを通して失敗したなと思ったことについて話したいと思う。もちろんミスしたことはたくさんあるのだが、その中で個人的に凹んだことで、なおかつ今後を活かせそうなことが1つある。それは、盲目になりすぎたことだ。

これだけだとよくわからないと思うので、詳しく話していこう。僕は以前、ビジネスコンテストにチャレンジしたことがある。その時、担当の先生から口酸っぱく言われたことがあった。

「ビジネスっていうのは、そのビジネスを実行して何をしたいか、誰を救いたいかっていうのが重要なんだ。それと金を稼ぐことを両立しないとイケない」

しかし、残念ながら今回の僕は、社会貢献という観点が見えなくなって、利潤の追求面に走ってしまった。非常に残念なことである。さらに残念なことに、このことにはたと気が付いたのは、他のチームの発表を聞きいていたときであった。表彰の際に前に立って話していた方が、「今回のビジネスプランには優しさがあふれていました」と話されていたが、しかし僕には優しさがあつたのだろうか……？ 否、と言わざるを得ない。あとで振り返ってみて、自分はなんて冷たい人間だったのだと気付かされた。

でも、おそらくこのことは、僕の今後の

人生に活かされていくと思う。そういった意味で、今回のキャンプは、もっというとして6チームのみんな、他のチームのメンバーみんなは、僕に少なからぬ「気づき」を、盲目的な自分に新しい世界を与えてくれたのかなと思っている。

こんなことから、僕は今回のキャンプが自分にとって刺激的で、自分を高めてくれて、自分の感性に影響を与えてくれた良い機会だったと思う。そして、おそらく今後も自分に影響を与え続けてくれると信じている。今まで日本の、関東地方に引き籠っ

ていた僕に、いきなりワールドワイドに友人ができたのだから（ちなみに、6チームのメンバーのうち、東京に止まらず関東地方に住んでいるのは自分だけで、すごく離れた地域に繋がりができた。まったく驚きである）。そして、今後も積極的に外に目を向け、飛び出して行こうと思うようになった、そんな今年の夏であった。

最後になりますが、キャンプに関わったすべての皆様に、感謝の意を表します。本当にありがとうございました。今後の活躍を期待しています。

